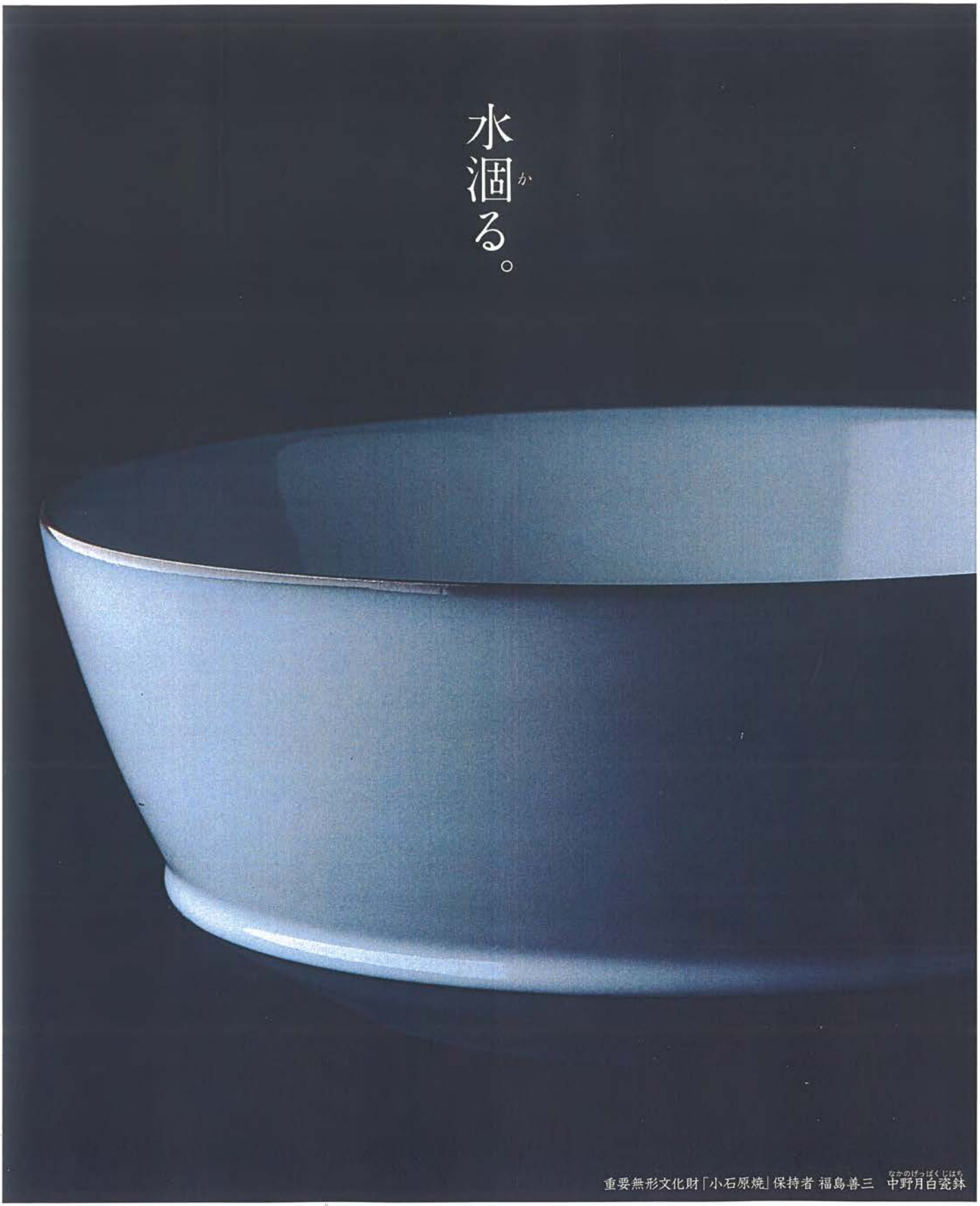
お帳場通信

MITSUKOSHI
2017-18 WINTER 冬



重要無形文化財「小石原焼」保持者 福島善三　中野月白窯鉢(なかのげっぱくがまばち)

PHOTOGRAPHS NARUYASU NABESHIMA TEXT MICHIKO WATANABE

林屋晴三——追悼
流儀を超えた茶の湯の話 その④

「型を破る」

茶人であり、稀代の目利きであった林屋晴三さんが惜しまれつつ逝った。厳しい言葉の中に常に温かい眼差しがあった。縁深いお二人に思い出を語っていただく。林屋さんは今まで出会ったすべての人の心に、思い出とともに今も生きている。

林屋晴三
はやしや・せいぞう
1928年京都府生まれ。東京国立博物館名誉会員。頴川美術館理事長。少年の頃から茶の湯に魅せられ、長年、茶の湯文化の陶磁の体系化に尽力。2007年織部賞受賞。現代作家の器による茶会も、精力的に開催。名碗の研究のみならず、現代の茶道具の魅力を伝えることにも力を注ぐ。著書、編著書多数。

自由な形の茶の湯「茶の湯同好会茶会」の会記を見る村瀬さん。

東京・新宿〈柿傳〉で、現代の道具だけの取り合わせで開く「茶の湯同好会茶会」を、足かけ11年、昨年の12月まで58回にわたって続けていた林屋晴三さん。「私のライフワーク」「100回は続けたい」と語っていたそうだが、その嚆矢から最後の回まで、ほぼすべての手伝いをしたのが、漆芸家・三代目村瀬治兵衛さんと〈柿傳ギャラリー〉店主の安田尚史さんだ。地方での茶会にも同行した二人に、林屋さんへの尽きない思いを聞く。

村瀬治兵衛（以下 村瀬） ご縁をいただいたのは、平成13年（2001年）、三代目襲名を前に、林屋先生に推薦文をお願いしては、と助言をいただいたからなんです。先生は作品を全部ご覧になって、「頑張ってはいるが、まだまだ見るべきものはない。今後に期待」と。その後、襲名披露にもいらしてくださって、「もう一回見た。まあまあよくなっている」とお言葉をいただきました。先生への御礼をどうしたらいいか悩んだ末、家内の母がおはぎが得意だったので、お届けしたんです。すぐに電話をくださいまして、「こんなおいしいおはぎは食べたことがない」と喜んでくださった。ただ、私が作った器に入れてお持ちしたのですが、「器はイマイチだな」って（笑）。ほんとうによく気がつく方だと思いました。地方にお伴するときなど、助手席に座った家内の髪型、きものと帯、帯〆の色合いについて、いろいろおっしゃる。

林屋さんのお気に入りだった柿傳・残月の間で、思い出にふける二人。

「先生の美意識に、考え方に、教わることばかりでした」 村瀬治兵衛

私なんか、家内は今日、どんなものを着てたかなというレベルですからね(笑)。人に会ったとき、また、モノを見たときの鋭さって何だろうと思いました。すごい人だと最初から感じていましたね。

安田尚史(以下 安田)　私は家業を継がず、サラリーマンをしていたので、初めてお会いしたのは、平成17年(2005年)、自分の結婚披露宴のときでした。翌年の初釜から始まって、治兵衛先生にもお世話になりながら、茶会を通じて交流が深まっていった。日本全国お伴しました。

村瀬　先生のご自宅と私の工房が近かったこと、また、私が車の運転が好きなこともあって、茶会の折の道具運びや水屋のお手伝いをたびたびさせていただくようになりました。どんな長距離でも、お伴して。先生に喜んでもらおうという気持ちだけでしたが、それが生き甲斐になっていきました。先生の水屋は、美術館を見て回っているような、素晴らしいものが集まります。勉強になることが多かった。先生のお点前がまた素晴らしかったですよね。型にハマることを嫌われましたが、かといって、お茶は型をもってするもの。そのお点前には気が入っていた。先生が濃茶を練られているときに、水屋の後ろから陰点てのタイミングを見ているのですが、あまりの気迫に引き込まれて、忘れそうになることが、ままありました。

安田　先生に見てもらいたくて、水屋に器を持ってこられる若い作家の方も多かったですね。

村瀬　みんな、ドキドキですよね。

安田　そう。ダメ!と一刀両断のときもあるし、気に入った作品なら、いいね、いいねと、ずっと掌で遊ばれて、嬉しそうなお顔をされる。

村瀬　モノを作る人にも、お茶の先生方に対しても、あれだけズバズバ言える人、他には知りません。ともかく鋭い。ちょっと妥協するとすぐに指摘されるんです。あるとき、水指を作ったのですが、木に割れがあったため、予定より10ミリほど低くなってしまった。すると、「もう1センチ高いといいな」と。また、あるときは「ここを直したら」と言われて、絹糸2本分か3本分削ったんです。パッと見、何も変わってないように見える。ところが、それを見て、「直ってるじゃないか」と。目に焼きつける記憶力がすごい方だと思いました。

安田　味の濃い、薄い、形がいい、悪い。ともかく、細かいことに気がつかれる。すべては、人を育てようというお気持ちからだと思いますが。

村瀬　そしてよくなったら、自分のことのように喜んでくれたし、ほめてくださった。モノを作る人間としては、ものすごく張り合いがありました。

林屋先生に育てていただいた、と安田さん。

「名品にも現代作品にも通じた、不世出の先生でした」安田尚史

右が鈴木藏さんの茶碗、左が鈴木さんの窯で林屋さんが作った茶碗。

安田　ともかく、みなさんに喜んでいただきたいというお気持ちの強い先生でしたよね。

村瀬　その喜ばせたいという先生を、私たちは喜ばせたいと思っていた。茶会は舞台。そこでどう演ずるか。道具をどう組み合わせ、しつらえていくのか。先生のそばで、それをお手伝いできることは至福でしたね。何より楽しかった。花の選び方、生け方も凄いなと思いました。地方の茶会で、先生が欲しいとおっしゃれば、夜中に花を調達に行ったこともあるし、九州の茶会に北海道から花を取り寄せたこともありました。

安田　現代の道具を使っての茶会は非常に稀で、また、それで人を集められる人も少ないと思う。柿傳での茶会を、先生は「実験劇場」とおっしゃっていた。残月の間を、現代の道具を取り合わせる舞台としてはとてもいいとおっしゃって。

村瀬　現代アートや工芸を茶席に持ち込むことは、利休時代のお茶の精神に通じるものがあるのではないでしょうか。竹切ってきてどうだ、伊賀の破袋どうだ、という従来の美意識にとらわれない、当時の〝現代茶会〟と同じことだと思うんです。利休や織部の美意識に近い。

安田　骨董の世界、名品の世界にも詳しい、現代作家の作品にも詳しい。両方を知り尽くした上で、現代をやる。そんな人は他にいませんよね。

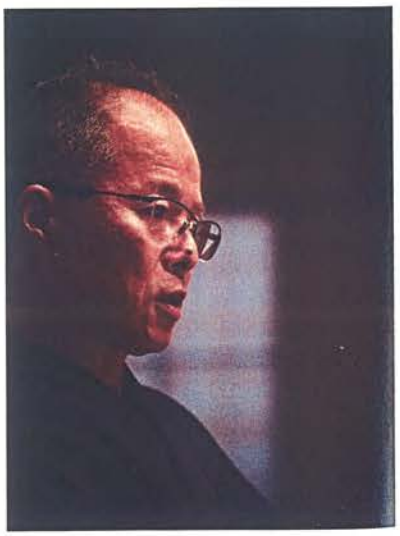
村瀬　普通は、替茶碗の三、四碗目で現代が入るぐらいですから。あるとき、関泳麒（ソンヨンギ）さんの茶碗を茶会で使ったことがあった。替茶碗として。そうしたら、先生が主茶碗にしていた古いものと、関さんのを二つ並べて、「おまえはどっちがいいと思ってるんだ。美意識からいったら、完全に関さんのほうが上だぞ」と。古いのだけがいいって訳じゃないと言われ、それから現代のものを主茶碗として使うようになりました。

安田　それにしても、58回続けたことは凄いことですよね。

村瀬　先生は頭で考えるのではなくて、五感で感じろ、とよくおっしゃってましたよね。

安田　光悦にしても長次郎にしても、どんな人かは調べればわかるんだから、それよりまず何を感じるかが大事なんだと、若い人たちにも惜しげもなく器を持たせていました。

村瀬　先生に出会っていなかったら、今の私はありません。過去の写しではなく、あれも作りたい、これも作りたいと創作意欲が湧いてきたのも、妥協のない作品づくりも、すべて先生のおかげです。

〈三代 村瀬治兵衛〉
右から
市松中次
径6×高さ9.5cm
345,600円
根来塗薬器茶器
径9×高さ6cm
432,000円
欅鉈削中次（けやきなたそぎ）
8×7.5×高さ9cm
756,000円
＊
還暦記念 村瀬治兵衛 漆芸展
2018年2月21日（水）～27日（火）
本館6階　美術特選画廊
（最終日は午後5時閉場）
[お問合せ]日本橋三越本店
本館6階　美術工芸サロン
TEL 03-3241-3311（大代表）

村瀬治兵衛
むらせ・じへい
1957年、江戸時代から七代続く木地師の家に生まれる。三代前から木地に加え、漆塗りまで一貫して手がけるようになる。東京造形大学卒業後、家業である木地師・塗師に従事。2001年、三代目治兵衛襲名。茶道歴40年を超える。